木幡小平次

小平次は、何時も然うしている。

頸を胴躰に深く埋もれさせ、脊椎も折れよう程に彎曲て、貧弱な顎を突き出し、腰を浮かせて固まっている。左手では自然薯の如きふたつの膝頭を抱え、右手では爪先立った右足の踵を摩っている。踵は荒れていて、皹割れた皮が厚く盛られているので、触れても感覚がない。指先は乾いた鏡餅の如きそれを感じているのに、踵の方は何の反応もない。己が自身に触れているのに、一向そうした感触がない。

触れている己が小平次ならば、この身体は誰方のものか。否、この躰こそ小平次なのだとして、触れている主体は何処の誰奴か。踵を弄うだけで小平次は、小平次というものから、もっと茫洋とした何かに薄まることが出来る。

希薄になるのは心地良いことだ。このまま薄まって薄まって、微昏がりに雑じってしまえれば、小平次は殊の外幸福である。だが、それでも、どれ程希薄な心持ちになっても、己は矢ッ張り小平次という塊だ。ぎゅっと固まって、暗の裡で孤立している。闇が深ければ深い程、慥かに輪郭は曖昧になるのだけれど、芯の方は濃ゆく固まっているように思えてしまう。

細長き隙間には白いものが覗いている。

それは艶めかしく動いている。小平次はその白いものを、凝眸している。

白く見えるは、多分襦袢だ。否、和毛の生えた白い襟首だ。いずれにしても白い、真っ白な女の表面だ。

ただ、それは夜気に映えるだけの青白き小平次の皮膚とは違って、ほんのりと、淡い朱を帯びた、桜の如き柔肌である。筋張って硬く、いつも冷え縮まっている小平次の躰とは違って、軟らかく摂理細かく、温もりを帯びた肉である。

肉はぬらり、と動いて、今度は濡れ羽の如く黒い、てらてらと艶やかなものが覗いた。

女の髪の毛。

結い上げてはいない、洗い髪である。

最前まで女は、座敷の向こうに見える庭先で盥に水を張り、行水をしていたのだ。

今は小平次に背を向けて、多分茶碗で冷や酒を浴びている。

水気を帯びた重たげな黒髪がてらりと揺れて、隙間には矢張り白くて細い女の腕が覗いた。

大指と高指で抓むように茶碗を持ち、残りの三指はぴんと伸ばされている。小平次は、眼を細め、伸ばされた紅付指の先を見た。それでも、小平次の意識は己の右手にある。自が踵を摩っておるのはもしやあの指ではなかろうかと、どこかで夢想しているのである。

枯れ木のような小平次の指とはまるで違う、靱かな指。

その靱かな指の持ち主。

お塚。
小平次の妻。
細い隙間から凡てを見渡すことは出来ぬけれど、お塚は一度首を竦めたようだった。
そうした時、小平次は慌てて縦長の世間から目を逸らす。自分の視線がお塚に感じ取られたのではないかと思うと、居た堪らなくなるからだ。
小平次はささくれた敷居に目を遣る。
ふん、という女声が聞こえた気がした。
「下を向いておるのかえ」
三味の音に似た、淫らで華やかな声音である。
どうせ板間の埃でもなぞっておるのじゃろうと、その声は続けた。
「妾がぴくと手を挙げりゃア、主ゃアびくと怯える、謔たことじゃわい。イヤ、そう案ぜずとも主の目筋にゃ慣れたわいと、そう申したいところじゃが」
そうは行かぬわえと、お塚は横顔を見せた。
密な睫に縁取られた切れ長の眼。
蔑むような流し目が小平次の居る方向に投げ掛けられる。
「ええい、何日経とうと何年経とうと慣れぬわい。薄ッ鬼魅悪い。気が触れるにしたッてもう少しマシな触れ方があるじゃろう。日がな一日押入棚に引き籠り、女房の臀やら背やら眺めるだけの男など、いったい何処におろうかや」

だから小平次は微昏がりは好むけれども、真の闇は畏い。
例えば、瞼を閉ざせば暗闇はすぐに訪れる。
だが、眼を塞げば世間が消えて罔くなるのかと問えば、そんなことはない。己が消えて無くなるのかと問えば、そんなこともない。
不可視くなることで己が此処に居ること其処に在ることがより明瞭としてしまうのだと、小平次は思う。世間が溟くなればなる程に、肌は外と裡との鬩ぎ合う境界となる。目を瞑れば己も世間もなくなるが、途端に身体の表面は薄膜となってしまうのだ。それは薄い薄い、絹より薄い膜なのだけれども、それはまた、決して破れることのない膜である。裡と外とをきっかり仕切る幕である。肌に外気が触れる度、裡の内気が満つる度、己の像はくっきりとする。
小平次はそれが厭だ。
何ごとにつけ小平次は、淡く、閑やかで、冷ややかなるを好むのだ。
昏黒の中に身を置くと、冷えている筈の肚の中が滾ったかのように覚え違う。すかすかと稀い筈の胸の中が詰まっているかのように覚え違う。がらんどうの筈の頭の中心に核でもあるかのように覚え違う。
眩い陽光の下は最初から適わぬのだけれど、真っ暗闇とて大差ない。
だから小平次は、いつも微昏がりに居る。そして、両の眼を確乎りと明けている。
湿っても乾いてもいない、仄昏く冷たく、埃の匂いしかせぬ納戸の中で、身を屈め、首を突き出して、いつもいつも、眼球が乾く程に瞼を見開き瞳を凝らし、凝乎としているのである。

納戸の戸襖は僅かに開けられている。
閉めてしまえば裡は闇となる。だから必ず開けてある。
その、細い細い縦長の隙間こそ、小平次にとっての世間である。
その細い細い縦長の隙間から漏れ入る幽けき光だけが小平次を照らすのだ。
否、それは、照らすという程の強さはないのだ。その明かりは頗る頼りなく、幻燈のように痩せっぽちの自が姿を微昏がりに浮かび上がらせるだけだ。浮かぶ姿は、朦朧としているというよりも、寧ろ透けているかのようである。
そして小平次は、自分が果敢ないものであることを確認する。稀薄であることを堪能する。
羅のように滑らかで、厚みも温もりもない。
その、まるで幻像のような肉体から、更に小平次は後ろに退く。
その為に小平次は踵を摩る。指先の覚えが小平次を薄膜の外へと誘う。
そうして、いいだけ薄まって、小平次は漸く落ち着く。
眼と指。
小平次はそれだけのものになる。
だから小平次は、いつも然うしているのだ。
微昏がりの押入れの中、身を屈め踵を撫で乍ら、一寸五分の隙間から世間を覗く。
縦長の世間はいつも夢幻のようで、それでもあちら側こそ真実なのではあろうから、矢張り我こそが夢幻なのであろうかやと、小平次はそう思うているのである。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。